

愛知県新城市立新城小学校における校内授業研究の基盤構築

— 渥美利夫による校長室通信『考える』の分析をもとに —

山下 大喜
白井 克尚
生 克尚
久野 亜樹子
弘 幸

はじめに

本稿の目的は、愛知県新城市立新城小学校（以下、新城小とする）の事例を取りあげ、渥美利夫による校長室通信『考える』が校内授業研究の基盤構築において果たした役割を明らかにすることである。

日本の授業研究は、明治・大正期から蓄積され、教師が互いに学び合う文化として学校教育に内包されている。授業研究の蓄積から多様な実践が生み出され、問題解決学習もその歴史から紡がれてきた実践の一つである。本稿で取りあげる渥美利夫は一貫して問題解決学習の実践研究に取り組んだ社会科の初志をつらぬく会（以下、初志の会）を代表する実践家であり、校長としても問題解決学習を中核

とした校内授業研究を模索し続けた。

これまで、渥美について、木村博一は、渥美が地域教育実践の構築に尽力し、一貫して問題解決学習の普及につとめていた実践史的意義を明らかにしている^①。山下大喜、白井克尚、土屋武志は、渥美が長きにわたり初志の会の機関誌『考える子ども』の編集に携わっていたことに着目し、渥美が校長時代に担当した同誌連載から、「現場の授業研究」を志向しつつ社会科を中核とした校内研究体制の構築に取り組んでいたことを明らかにしている。なかでも、新城小学校長時代（一九八三年四月―一九八七年三月）について、的場正美は「教師相互の協働研究」を通じて作成された「複線型授業案」が授業研究の方法論史において重要な一例であると位置づけている^②。これに関連して、白井克尚

は校内史資料の検討やインタビュー調査を進め、「複線型授業案」の作成過程に内在していた「三枚重ねの論理」に着目し、その事前検討プロセスに新城小における校内授業研究の独自性が存在したとしている⁽⁴⁾。こうした一連の新城小における「初志の会の問題解決学習を中心とした授業研究」は、渥美校長退職後も継続的に展開され、的場正美は、一九九二年の杉浦徹実践を事例に、そこには「当時の渥美利夫の考えとそれを具現化した学校の歴史と研究の考え方や方法が反映されていること」を明らかにしている⁽⁵⁾。

これらの先行研究からは、初志の会との交流関係を背景としつつ、渥美が問題解決学習の普及につとめた地域的役割や新城小における校内授業研究の方法論的特質をみてとることができる。的場正美が論じるように、新城小は渥美校長のもと「初志の会の精神を基礎」としつつ組織的に「問題解決学習を推進する」研究拠点校でもあった⁽⁶⁾。このように従来の諸研究では、渥美校長のもとで展開された新城小の校内授業研究が組織的かつ継続的に行なわれ、研究史のなかでも特筆すべき重要な事例であると論じられてきた。新城小における実践的な模索がみられる史資料として、これまで校内研究紀要『新城レポート』、研究図書『しゃべる授業から見守る授業へ——子どももの五〇パーセント発

言をめざす」、渥美自身による『考える子ども』での連載が取りあげられてきた。校長として渥美が果たした役割をさらに考察するためには、渥美自身による校長室通信『考える』が重要な史資料となりうる。

そこで、本稿では、校内授業研究に先立って行なわれていた現職教育に焦点化する。現職教育で渥美は自筆の校長室通信『考える』を配布し、それをもとにしながら校長講話を行なっていた。千々布敏弥は、「校長が自分の信念を教職員に理解（支持）してもらおうとする場合、集団に対する語りかけという手法が多くとられている」として、校長リーダーシップにおける校長講話の意義を論じている⁽⁷⁾。この指摘をふまえるならば、渥美自身が現職教育で配布し、校長講話として自らの声で直接語りかけていたことから、校長室通信『考える』は校内授業研究にかかわる研究方針の共有化、具体化、改善への模索にとって基軸となる役割を果たしていたとみることができる。

以下、まず第一節では、校内授業研究を展開するにあたって、新城小ではいかなる研究体制が組織されていたのかについて明らかにする。第二節では、学校組織全体で校内授業研究の研究方針を共有化するにあたって、校長室通信『考える』をもとにした現職教育がいかなる役割を果たしたのかについて考察する。そのうえで、第三節では、校長室通

信『考える』をもとに、渥美がいかなる授業研究方法論を参照しながら、校内授業研究の方策を示していたのかについて論じていくことにする。

一 校内研究体制の組織化

本節では、新城小で展開された校内授業研究の全体像をとらえるため、渥美校長のもとで組織された校内研究体制の概要を示す。

渥美が新城小へ校長として赴任したのは一九八三年四月のことである。それまでも、渥美は校長として東陽小学校（一九七六年四月―一九七八年三月）、東郷東小学校（一九八〇年四月―一九八三年三月）において社会科学を中核とした校内研究体制の構築に取り組んでいた。⁽⁸⁾ 東郷東小学校では、中西光夫校長（一九七〇年四月―一九七三年三月）のもと「ひとりひとりの考えをだいにする授業」を主題とした校内授業研究が展開されていた。⁽⁹⁾ 渥美はこの研究蓄積をふまえながら、「子どもの側に立った教育で社会科学中心の研究体制で進む」ことにした。⁽¹⁰⁾ 一九八三年四月に渥美は新城小へと異動することになるが、中西光夫校長の後任として直接バトンを受け継ぐ形での着任であった。

新城小着任にあたって、渥美は自らが編集をつとめる初

志の会の機関誌『考える子ども』で連載「しろあとの記」を新たに開始している。その一番初めの連載記事において、渥美は「新しい学校で」を副題として、「今まで東陽小、東郷東小での経験した方式を主軸にして、さらに短期間にどう充実させるかというよりほかにとる道はなさそうである」と記している。⁽¹¹⁾ ここで、まず渥美が着手したのが校内研究体制の組織化である。

新城小の校務分掌は「生活部」、「教務部」、「研究部」、「保健部」、「環境部」に分かれていた。渥美は「研究部」のもとに全校的な校内研究体制を組織した。その全体像は以下の図一に示した通りである。⁽¹²⁾

上記からも明らかのように、渥美は全校的な体制とするため、「タテ糸とヨコ糸の織りなす」形で校内授業研究の

生活部	教務部	研究部	保健部	環境部
研究会部会				
	朝の会	抽出児	単元構想	本時の展開
低学年	2人	3人	1人	2人
中学年	1人	3人	2人	2人
5年生	3人	1人	1人	1人
6年生	1人	1人	2人	2人

図1 部会組織

組織化を図った^⑬。具体的にいえば、「タテ糸」の「学年別グループ」である「低学年」、「中学年」、「五年」、「六年」と「ヨコ糸」の「分野別グループ」である「(一)朝の会(子どもの発言)」、「(二) 抽出現(カルテ)」、「(三) 単元構成」、「(四) 本時の展開」が互いに織りなす形で「研究会部会」を組織した。渥美は校内の教員全員が必ず上記のいずれかに属するような形にした。そのうえで、「研究部」には「学年別グループ」からそれぞれ一名(合計四名)が参加し、学校全体の研究をとりまとめる「研究推進の役割」を担わせることにした^⑭。

以上のような部会編成のもと、渥美は校内授業研究を進めるうえで具体的なプロセスについて、「研究授業はさみ、事前検討会一回・事後検討会二回を行ない、合計三回の部会を重ねていく」形とした^⑮。そのなかでも、これまでの諸研究からも明らかのように、「教師相互の協働研究」を通じて「複線型授業案」の作成がなされていたことは、新城小における校内授業研究の独自性として大いに特筆すべきことである。とりわけ、渥美が複線型授業の実現に向けた事前検討を重要視していたのは、「今までの研究のプロセスは、すべて『あった授業』のあとで行われる事後検討としての授業研究であった」という反省があったからであり、「少しでも子どもの論理を授業の主体」にするため

でもあった^⑯。

二 現職教育と校長室通信『考える』

本節では、校内授業研究の研究方針を学校組織全体で共有化するにあたって、現職教育で配布された渥美による自筆の校長室通信『考える』が果たした役割の重要性を提示する。

新城小において、現職教育は校内授業研究に先立つ形で具体的な研究方針を共有化するために実施されていた。それと同時に、現職教育は事前検討、研究授業、事後検討のプロセスを経て浮かび上がってきた課題を検討し、改善策を導出していく場でもあった。

渥美の前任にあたる中西光夫校長も新城小時代には現職教育のために『白雲悠々』と題した校長室通信を発行していた^⑰。東郷東小学校では中西の前任にあたる黒田親校長が『授業見てある記』と題した校長室通信を毎週職員へ配布していたという。新城小では各教員によってこまめに学級通信や学年通信が発行されており、そこで中西は「真摯な学級経営への取り組み」に触発される形で校長室通信の発行を試みることにした。加えて、校長室通信の発行を試みてもう一つの背景として、中西は東井義雄による『培其根』

をあげている。この『培其根』について、中西は以下のよう
に記している。

東井義雄先生が校長になってから、『培其根』という
プリントを出され、時折頂戴したことがある。職員の実
践記録を自らプリントにされて、それにご自分の所感を
書かれた、子どもと担任教師と校長の一体となった、実
に尊い東井先生ならではのお仕事である。

ここであげられている『培其根』とは東井が八鹿小学校
(兵庫県)の校長をつとめていた際に発行されていたもの
である。個々の教師による実践記録とその省察が記された
『週録』に東井がコメントを寄せ、そのやりとりを東井は『培
其根』として配布していた。実践記録とそれに東井の言葉
が附された『培其根』は、現職教育において学校経営や授
業づくりの具体的な研究方針を組織全体で共有化していく
重要な媒体として機能した。これに加えて、東井義雄の授
業づくりを論じた豊田ひさきの研究で指摘されているよう
に、『週録』を通じた教師たちとのやりとりは東井自身が
実践してきた「生活綴方的教育方法」にも通底するもので
あり、そうしたやりとりを校長室通信の形で共有化するこ
とにより、東井は教師同士がつながり合う協働的な校内研

究体制の形成を試みていたのである。⁽¹⁸⁾ 総じて、校内の実際
に即しながら作成された校長室通信は学校現場を基盤とし
た校内授業研究の基軸となる重要な役割を果たし、中西の
叙述にもみられたように本稿で対象とする地域においても
同様な試みが歴史的に蓄積されていたのである。

このような歴史的蓄積を背景としながら、同じく「現場
の授業研究」を志向していた渥美自身も現職教育における
校長講話の主たる題材として自筆の校長室通信『考える』
を「一枚文集」の形で発行していた。渥美の『考える』は
東陽小学校校長時代から始めたものであり、新城小時代に
限っても四年間合計で一二〇号を数えた。⁽¹⁹⁾ その内容は授業
づくり、子ども理解、指導案作成、社会科授業、学校行事、
公開授業研究会など多岐にわたっている。現職教育で『考
える』を配布する狙いについて、渥美は「授業を考えるよ
りどころとし『学校づくり』の核として職員とのパイプの
役割を担わせた」と記している。⁽²⁰⁾ 当時、新城小の教員であつ
た杉浦徹は、『考える』には「全職員が子ども一人ひとり
を見守り授業改善に向けてどのように自己変革していくの
か」という「渥美の願う教師像」が「多角的に」書かれて
いたという。⁽²¹⁾ そのうえで、『考える』をもとにした渥美の
校長講話について、「具体的な方策と背景にある教育にか
ける信念に一つ一つ納得して聞き入りました」と振り返っ

ている。⁽²²⁾ これらの証言からは、新城小において現職教育が「授業を考えるよりどころ」となる役割を果たし、『考える』をもとにした渥美の校長講話が学校組織全体で具体的な研究方針や今後の展望を共有化する重要な役割を果たしていたことがわかる。

次節では、多岐にわたる『考える』のなかでも、渥美が校内授業研究の基盤構築にあたって参照していた授業研究方法論を検討するため、『考える』第十四号の「読むことと書くこと」(一九八三年六月三〇日)を分析の中心にする。⁽²³⁾ この第十四号において、渥美は「教育学者のもの」と「実践家のもの」の双方から授業づくりにあたって参照してほしい文献を取りあげている。

三 先人から学ぶ姿勢

本節では、渥美による自筆の校長室通信『考える』第十四号を中心としながら、校内授業研究の基盤構築にあたって渥美が参照していた授業研究方法論を順に検討し、校内授業研究の研究方針がどのように共有化され、具体化されていったのかについて論じていく。

『考える』第十四号をもとにした現職教育が行なわれたのは一九八三年六月三〇日であり、渥美にとって新城小初

年度の夏休み直前にあたる。その冒頭で、渥美は「読むこと」について以下のように記している。

読書することが、ある意味では商売ともいべき職業でありながら、つね日ごろ多忙にかこつけてなかなか本が読めないのが実情のようである。この夏休みには、ひとつまとまったものを読んだらどうかということである。

ここで学期中には多忙なため時間の確保が難しい「読むこと」について、渥美は夏休みを活用し、「ひとつまとまったものを読んだらどうか」と提案している。ここで、授業づくりにとって「読むこと」に教師教育的意義があることにも留意しなければならない。秋田喜代美は、実践記録を「読むこと」によって、「その他者の経験から自分のいまだ経験していないことについての見通しをもつことができたり、あるいはすでに経験していることを意味づけ直したり、代理的経験によって自分の経験のなかにもあらたなものを発見することができる」と論じている。⁽²⁴⁾ 戸田山和久は、「読書」とは「過去の人々との対話」であり、「文化遺産を継承するリレーの担い手になる」ことで、「読むこと reading」と「読まれるもの readings」が同時に保存され

ていくと論じている。⁽²⁵⁾ 渥美が夏休みにあたっての現職教育で「読むこと」を薦めた背景には、「読むこと」を通じて教師たちに自らの授業づくりを見通し、意味づけ直してほしいと考えたからである。加えて、現職教育に「読むこと」を位置づけることは取りあげた文献がリーディングスとして読み継がれ、新たな授業実践が紡ぎだされていくことを意味している。

以上をふまえ、渥美は「この夏休みに、じっくりと読書をしていただきたい」ものとして、「教育学者のもの」と「実践家のもの」をあげている。

(一) 「教育学者のもの」——上田薫——

まず「教育学者のもの」として、渥美は上田薫の著作を取りあげている。渥美が上田と出会ったのは一九五一年から一九六〇年まで勤務していた東郷東小学校時代であり、そのとき東郷東小学校における校内授業研究の講師として招かれていたのが名古屋大学に赴任したばかりの上田であった。⁽²⁶⁾ また、その同時期には上田が中核の一員として名を連ねた初志の会が設立され、渥美自身も設立当初から初志の会に所属し、一貫して社会科学における問題解決学習の実践研究に注力していた。渥美は『考える』第十四号において、そうした歴史的背景をふまえながら以下のように上

田の著作を取りあげている。

上田先生は、経験主義教育の理論的支柱である。西田哲学の祖、西田幾多郎を祖父とする名門の出で、京都大学哲学科の出身である。新学制出発時から文科省にあって社会科学を日本に導入した担当であった。経験主義教育の最高峰といわれる昭和二十六年版指導要領の作成者であり二十歳後半の業績である。戦後教育の名著中の名著といわれる『知られざる教育』は、昭和三十三年名古屋大学に勤めてみえるときに書かれたものである。つづいて『人間形成の論理』、『ずれによる創造』、『絶対からの自由』を出版された。その他多数の著書があるが、ここでは省くことにする。現場指導で静岡の安東小、千代田東小でカルテによる授業の新生をもとめられたことは、多くの人の知るところといつてよい。

上田先生の思想、哲学は、名著主著をひもどくというより、随筆集である『林間抄』とか『層雲』（黎明書房刊）を読むのがもつとも抵抗が少なく賢命の策といつてよい。読んでいくと、わたしたちが常識という名のもとに、なんら疑いもなく思っていること、考えていることの皮相が一枚一枚ひき破られていくのに、そう時間はかからないであろう。「論理の逆転」ということの必要さが、

具体的な事例のなかからわかっていくことはたしかである。項目ごとどこから読んでもよいことも助かる。

ここで渥美は戦後カリキュラムの基軸となった「経験主義教育」を取りあげつつ、その中核を担った上田の経歴を紹介している。渥美の『考える』ではこの第十四号だけではなく、多くの号で上田の著作が参照されている。とりわけ、現職教育で上田による授業研究方法論を参照しながら、新城小における校内授業研究の独自性とされる「複線型授業案」の事前検討プロセスが具体化されていたことは大いに特筆すべきことである。

『考える』第五十六号（一九八四年六月二十一日）には、「一時間の授業の終り方」と題して、「指導案を書く時点でまず、このような終り方と、このような終り方が考えられるというように複線にすることが肝要」であると記している。⁽²⁸⁾さらに、授業の「複線的計画」にあたっては、「教師がこのような展開でいったときに、抽出児のだれだれさんは、どんな疑問をもつだろうか、どんな問題をもつだろうか予測することが、たいせつな条件と考えてよい」としている。

渥美が上記のように複線型授業の重要性を説く背景には、上田による授業研究方法論が大いに関係している。上

田は「生きた授業を成立させる」ための重要な原則として「複線的計画」の意義を以下のように論じている。⁽²⁹⁾

このような計画をもつ教師はゆとりをもつて授業をすることができるとは限らない。したがって子どももよく眼に入るのである。それをとらえやすいのである。子どもはそれを感じるから、教師に迎合せず、いきいきと活動する。そしてそれゆえに教師の予測を越え、教師を発展させることができる。何段がまえに用意しても、子どもの動きはそれからかならずはみ出すであろう。

『考える』第六十二号（一九八四年九月十三日）では、「指導案の検討」と題して、渥美はその冒頭で上田の著作を以下のように引用している。⁽³⁰⁾

一枚の指導案は、どこに山をつくり、どう拮抗を活用するか、どのへんを曲がり角として予想し、二段三段のかまえを立てるか、教材のスペースを生かすチャンスはどこか。どこでどういうふうにあの子を生かすか。そういうことが一目して明らかにできるように記されていることが大切である。

上記の渥美による引用は、上田薫『ずれによる創造』に収められた「授業案断想」からのものである³³⁾。そのうえで、渥美は同号に「指導案の検討のチェックすべきところ」として以下の八点をあげている。

- 一. 目標のあらわし方
- 二. 複線的性格
- 三. 授業の曲がり角、山となるもの
- 四. 評価のこと、見切り
- 五. 能力差に応ずる工夫
- 六. 抽出児の登場
- 七. 時間の配分
- 八. 終わり方

渥美があげた八点は、上田薫「授業案断想」で指摘されている五点「目標のあらわしかた」、「評価のこと」、「能力差に応ずるくふうがあるかどうか」、「複線性格の必要性」、「授業の曲り角、あるいは山となるもの」とも共通しているものである。

そして、『考える』第六十三号（一九八四年九月二〇日）では、「子どもをもっと指導案のなかに色濃く反映させよう」と、「ダブルさせる方法（原文ママ）」が提示された。ここの「ダブルさせる」とは、「本時の展開そのもの」のA案と「抽出児がどのように反応するかを書いた」B案を重ね、それをもとに最終的なC案を作成することである。教

材中心のA案と抽出児の反応を中心としたB案を重ね、最終的なC案を作成する。A案とB案からC案へと「三枚」の指導案を「重ねる」プロセスを経ることから、一九八五年度には以下の図二のように「三枚重ねの論理」と名付けられることになった。以上を総合すると、渥美は「複線の計画」の重要性を認識し、一九八四年度から一九八五年度にかけては現職教育を通じて「複線型授業案」の事前検討プロセスを「ダブルさせる方法」から「三枚重ねの論理」へと具体化させていったのである。

（2）「実践家のもの」

『考える』第十四号では「教育学者のもの」と合わせて、渥美は「じっくりと読書をしていただきたい」ものとして「実践者の記録」を取りあげている³⁴⁾。

昭和七年卒の師範出身者に東と西に偉大な実践者がい

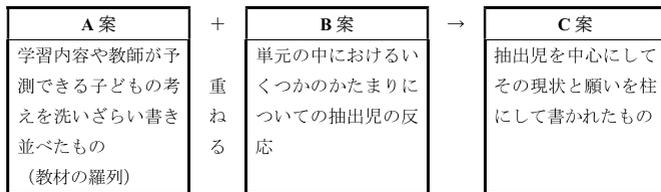


図2 三枚重ねの論理

た。東の齋藤喜博氏と西の東井義雄氏である。ちょっと下がつて昭和十一年卒奈良女子大付小の長岡文雄氏がわたくしたち実践者の先達の三羽がらすといつてよいであろうか。ここでは、わたしは東井氏の名著『村を育てる学力』（明治図書）と、長岡文雄氏の三部作といわれる『考えあう授業』、『子どもをとらえる構え』、『子どもの力を育てる筋道』（黎明書房）のいずれかをじっくり読んでほしいということである。

ここで渥美は「実践者の先達の三羽がらす」として齋藤喜博、東井義雄、長岡文雄をあげている。以下では、Iとして齋藤喜博、東井義雄、IIとして長岡文雄に分けて検討する。

I 齋藤喜博・東井義雄

渥美は「師範出身者に東と西に偉大な実践者がいた」として、「東の齋藤喜博」・「西の東井義雄」を取りあげている。周知の通り、齋藤喜博と東井義雄は近現代日本の教育実践史研究において双璧ともいべき代表的実践家である。渥美は『考える』第十四号に続く形で、以下の表一にあるように、「先人の遺産に学ぶ」と題して齋藤喜博と東井義雄による授業づくりの歴史的蓄積を取りあげている。

齋藤喜博は島小学校、東井義雄は相田小学校、八鹿小学校の校長を務めていた際に、地域に根ざしながら学校現場を基盤とした校内授業研究が展開され、子どもの論理を主体とした授業づくりが行なわれていた。ここで留意すべきなのは、一九五〇年代冷戦構造のもと政治的変動のさなかにあり、学習指導要領も系統的的色彩が強まるなかで、齋藤や東井によって学校現場を基盤とする豊かな校内授業研究が創出された点にある。田中耕治は、齋藤と東井の実践記録が「戦後日本が大転換していくなかで発表されたものであり、その問題意識の先駆性と具体的な教育方法の提示によって、今も多くの教師たちによって読み継がれてい

表1 「先人の遺産に学ぶ」（『考える』所収）

副題	号数	月日	主たる内容
齋藤喜博氏の実践	16	1983年7月14日	××ちゃん式まちがい
	17	1983年7月20日	授業の組立て
	19	1983年9月8日	学習指導の方法
東井義雄氏の実践	20	1983年9月16日	国語・読解力をみがく-
	21	1983年9月22日	ノートの利用
	22	1983年9月30日	みがきあい
	23	1983年10月6日	学習指導の形態
	25	1983年10月20日	東井義雄の「いなむらの火」から

る」とその歴史的意義を論じている。⁽³⁵⁾ 新城小の現職教育で渥美が斎藤と東井を取りあげていたことは、田中が論じるような斎藤と東井の実践記録が「多くの教師たちによって読み継がれている」一例であると位置づけることができる。⁽³⁶⁾ 渥美は「現場の授業研究」を志向していた。そこで、同じ地域に根ざしながら校内授業研究を展開した斎藤と東井による歴史的蓄積から、渥美は自らの校内授業研究に参照できる点を見出した。さらに、「先人の遺産に学ぶ」と題して連続的に現職教育で取りあげること、斎藤や東井といった蓄積が学校組織全体へと共有化されていったのである。

II 長岡文雄

長岡文雄は社会科問題解決学習において初志の会を代表する実践家である。また、一九四三年から一九八〇年にわたって奈良女子大学附属小学校に勤務し、長年にわたって「奈良の学習法」の実践的展開の中核を担った人物である。渥美と長岡は初志の会を通じて交流関係にあった。渥美が東陽小学校校長になってからは、校内授業研究を充実させる方策として「先進校との交流」や「助言者の招聘」を盛り込み、「先進校との交流」の参観先として奈良女子大学附属小学校を訪れ、「助言者の招聘」として長岡が公開授

業研究会の講師の一員として招かれていた。

渥美は『考える』第三号（一九八三年四月十四日）で長岡を「先生の教育理念と、その実践活動は戦後教育に新しい道を示し、まさに『奈良教育』として教育界をリードされてきた方である」としている。⁽³⁷⁾ 加えて、渥美は校長室通信『考える』の題名は長岡の著作から着想を得たものであると記している。校内授業研究の基盤構築にあたって、渥美は長岡が実践してきた「子どもをとらえる手だて」を参照し、自らの新城小における実践へと取り入れようとしていた。具体的に、渥美が長岡の実践を参照しつつ新城小で試みたのは以下の二つである。

第一に、校内研究体制として「分野別グループ」に「朝の会（子どもの発言）」の部会が設けられた点である。この「朝の会」は長岡が奈良女子大附属小学校で実践してきたものであり、長岡は「朝の会」の「友だちの話」は「子ども理解が進む場」であるとして、ここでの活動が「子どもがつくる授業」の創造へとつながっていくと認識していた。⁽³⁸⁾ この長岡による実践をふまえ、渥美は「分野別グループ」部会の一つとして校内研究体制のなかに「朝の会（子どもの発言）」を組み入れたのである。

第二に、毎月定期的に「近ごろ変わったこと」の作文に取り組んだ点である。長岡は教師が「子どもをとらえる」

には「子どもの自己表現」が重要であるとして、この実践は作文にあらわれる「個性的な思考体制」から「毎月子どもをとらえなおす機会」であり、「子どものカルテ作製の最も重要な資料を提供するもの」であるとしていた。⁽³⁸⁾ここでいう「カルテ」とは、「子どもの意外な面（エピソードなど）をとらえ、その解釈とあわせて書き記したものである」、「子どもの資料として座席表とあわせて、総合的な授業記録とともに授業分析においては重要な資料となる」ものである。⁽³⁹⁾「カルテ」、「座席表」は初志の会で展開された授業研究を通じて創出されたものである。初志の会との交流関係を背景に、渥美は「カルテ」、「座席表」を活用しながら、子どもの論理を主体とした授業を展開するための手だてとして、長岡が実践していた「近ごろ変わったこと」の作文を用いたのである。

おわりに

本稿では、愛知県新城市立新城小学校を事例に、校内授業研究の基盤構築にあたって、校長の渥美による『考える』が果たした役割について考察してきた。

冒頭でも述べたように、授業研究は教師が互いに学び合う文化であり、その組織的展開にあたって校長リーダー

シップが果たす役割が大きいと考えられる。一九五〇年代には斎藤喜博と東井義雄が、カリキュラムが系統主義へと転換するなかでも、学校現場を基盤とした校内授業研究を校長として模索し展開していた。そうしたなかで蓄積された実践記録は多くの教師に読み継がれ、渥美も「現場の授業研究」を志向していたことから、「先人の遺産に学ぶ」と題して斎藤や東井を連続的に取りあげていた。

本稿の事例が位置する新城で育まれた学校文化をみてみれば、長年にわたって問題解決学習の実践研究が取り組まれ、大学の研究者とも交流関係にあった。東郷東小学校では中西光夫校長の際に研究者も招いて公開授業研究会が開かれていた。渥美は東郷東小学校校長へ着任するにあたって、中西校長時代の「ひとりひとりの考えをだいじにする授業」の蓄積をふまえ、校内研究体制の構築を試み、後の新城小では中西校長から直接の後任としてバトンを受け継ぐ着任となった。中西と渥美はともに社会科教師であり、一貫して問題解決学習の実践研究に尽力していた。校長としても、両者は問題解決学習を活かした校内授業研究の組織的展開で大きな役割を果たした。渥美の場合、その基軸となっていたのが校長室通信『考える』である。『考える』は校内授業研究に先立つ現職教育で配布されていた。現職教育は研究方針の共有化、具体化、および改善への模索

がなされていた場である。渥美は校長室通信という形で校内の実際と今後の展望を示し、それをもとに校長講話として教職員に直接自らの声で語りかけていた。『考える』には、先にあげた斎藤喜博、東井義雄に加えて、上田薫、長岡文雄も参照され取りあげられていた。先人に学びながら現職教育での積みあげを背景に、「複線型授業案」の作成プロセスが「ダブルせる方法」から「三枚重ねの論理」へと具体化され、「子どもをとらえる手だて」として「朝の会」の実践や「近ごろ変わったこと」の作文が試みられた。これらは校長室通信を基軸とする現職教育を通じて模索されたものであり、問題解決学習を中核とした新城小の校内授業研究にとって重要な基盤を担うものとなった。本稿では、校内授業研究における校長リーダーシップとして校長室通信を中心に分析を進めてきた。その応答関係にあたる教員、授業実践の視点に立った分析は今後の課題としていきたい。

【註】

- (1) 木村博一「地域教育実践の構築に果たした社会科教師の役割——愛知県三河地方における中西光夫と渥美利夫の場合——」『社会科研究』第七〇号、二〇〇九年
a、所収）、同「社会科教育研究の総括と社会科教育

史の展望」『社会科教育研究』第一〇七号、二〇〇九年b、所収）。渥美の主たる経歴については、同「愛知県三河地域教育実践関係資料」（戦後社会科教育実践史資料）文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、研究代表：白井嘉一、課題番号：19330195、二〇一〇年、所収）にみる事ができる。

(2) 山下大喜、白井克尚、土屋武志「社会科授業研究を中核とした校内研究体制の構築」（愛知教育大学教職キャリアセンター紀要）第五号、二〇二〇年、所収。

(3) 的場正美「授業研究方法論の課題と展望」『日本教育方法学会編『日本の授業研究 授業研究の方法と形態（下巻）』学文社、二〇〇九年、所収）一九一頁。

(4) 白井克尚「問題解決学習を創出した社会科授業研究の論理と実際——愛知県新城市立新城小学校の授業研究システムを手がかりに——」（『社会科教育研究』第一三五号、二〇一八年、所収）、Shirai Katsuhisa, Lesson Study to Create Social Studies Lesson Plans in Japan: The Case of Logic of Triple-Stacking, at Shinshiro Elementary Schools, *Journal of Social Studies Education in Asia*, Vol.8 (2019)。

(5) 的場正美「授業構想と展開のエビデンス——新城市立新城小学校の事例の分析——」（『東海学園大学研究紀要

- (人文科学研究編)第二十四号、二〇一九年、所収) 八十三、九十二頁。
- (6) 的場正美「社会科の初志をつらぬく会の授業研究」(『東海学園大学教育研究紀要』第一卷、二〇一七年、所収) 九十九、一〇四頁。
- (7) 千々布敏弥「校長のリーダーシップにおける講話の意義」(中留武昭編著『学校文化を創る校長のリーダーシップ ―学校改善への道―』エイデル研究所、一九九八年、所収) 一九五頁。
- (8) 前注(2)。
- (9) 中西光夫『歩みし道の標』(自費出版、一九八三年) 二八九―二九三頁。
- (10) 「学校づくりの記(2)」(『考える子ども』第一三二号、一九八〇年七月、所収)。
- (11) 「しろあとの記(1)」(『考える子ども』第一四九号、一九八三年五月、所収)。
- (12) 図一は、新城市立新城小学校「ヤル気を育てる」(新城市教員会、新城市教育委員会「研究紀要」第二〇集、一九八六年、所収) 六頁をもとに作成。部会内にある人数は教職員の配置数を示している。
- (13) 「しろあとの記(13)」(『考える子ども』第一六一号、一九八五年五月、所収)。
- (14) 校内研究紀要『新城レポート』(No.9、一九八五年十一月八日) 二頁。
- (15) 前注(14)、七十二―七十三頁。
- (16) 校内研究紀要『新城レポート』(No.8、一九八五年一月十九日) 五〇頁。
- (17) 前掲書中西光夫、二八二、三五七―三六九頁。退職後に行なっていた新任校長への講話(一九八七年四月)のなかで、中西は「最低月一回の校長室だより(校長からの通信)を出したいもの(東井義雄先生の培其根は、最高のお手本)」、「全校の職員が週一回の学級だより、一枚文集を出し、校長が校長室だよりを出したら、その学校はもうそれだけで相当な学校といつてよいであろう」としている。中西光夫「続 歩みし道の標」(自費出版、二〇〇五年) 八六頁。安井克彦は「私の教師史をふり返ってみると、中西先生の模倣をしていることが多い」として、その一つに「校長室だより」をあげている。安井克彦編著『三河のベスタロッツたち 三河の風土に生きた教師』(黎明書房、二〇二〇年) 三十八頁。
- (18) 豊田ひさき『東井義雄の授業づくり ―生活綴方的教育方法とESD―』(風媒社、二〇一六年)、豊田ひさき『東井義雄 子どものつまずきは教師のつまずき』

(風媒社、二〇一八年)。

八十八、九十三頁。

(19) 渥美利夫「昭和に生きる」(自費出版、一九八七年) 一三〇頁。新城小時代の目録一覽は一四七―一四八頁を参照。『考える』の史料閲覧にあたっては杉浦徹先生にご協力いただいた。当時の様子も教示いただいた。ここに記して深甚なる謝意を申し上げます。

(20) 前注(19)、一三二頁。

(21) 杉浦徹「社会科の初志を貫き全国との「架け橋」となった渥美利夫先生」、前掲書安井克彦編著、所収、一〇二頁。続けて、杉浦は「七月―九月」の『考える』には、「先人の遺産として上田薫・斎藤喜博・東井義雄・長岡文雄の著書を読みたい」とあつたと記している(一〇三頁)。

(22) 杉浦徹「『見守り続けてくださった渥美利夫先生の教え』を胸に」(『考える子ども』第三九二号、二〇一九年五月、所収) 六十七頁。

(23) 「読むことと書くこと」(『考える』第十四号、一九八三年六月三〇日)。第十四号は渥美利夫「昭和に生きる」にも収録されている。

(24) 秋田喜代美「実践記録と教師の専門性」(『教育』七一九号、二〇〇五年十二月、所収) 五十一頁。

(25) 戸田山和久「教養の書」(筑摩書房、二〇二〇年)

(26) 前注(23)。渥美は現職教育での講話や校長室通信には「ささやかながらも教育的思想、哲学が存在している」としている。続けて、渥美は以下のように記している。「教育実践の新しい創造のためには、実践と理論の統一が重要なことである。日々の実践に理論をつけ加え、さらに実践を高めることがだじなことであり、また理論に導かれて実践を検討するという過程も必要なのである。」

(27) 前注(2)。

(28) 「1時間の授業の終り方 ―付『展開』の表現へと―」(『考える』第五十六号、一九八四年六月二十一日)。

(29) 上田薫『ずれによる創造 人間のための教育』(黎明書房、一九七三年) 二五三―二五四頁。

(30) 「指導案の検討」(『考える』第六十二号、一九八四年九月十三日)。

(31) 前注(29)、二九五頁。

(32) 「指導案の検討(2)」(『考える』第六十三号、一九八四年九月二〇日)。白井克尚、松婷、土屋武志「学習指導案の事前検討における協働研究の方法 ―愛知県新城市立新城小学校の校内授業研究に焦点を当てて―」(『愛知教育大学研究報告(教育科学編)』第七〇輯、

二〇二二年、所収)では、校内研究紀要『新城レポート』をもとに、「複線型授業案」の事前検討プロセスにおける協働研究のあり方について論じられている。

(35) 前注(14)。図二は五十八頁をもとに作成。石川英志は、

「三枚重ねの論理」について、「その具体的な進め方については、新城小自身が安定させることなく、常に検討を繰り返してきており、それだけにまだ今後の課題を含んでいるが、そうした目標に対する柔軟で弾力性のある教師の姿勢はもつと多くの学校で支持され、検討されるべきものである」とその意義を論じている。

愛知県新城市立新城小学校『授業研究の考え方・進め方』(黎明書房、一九九三年)二二三頁。

(34) 渥美は斎藤喜博と東井義雄がそれぞれ師範学校を同年に卒業したとしているが、正確には斎藤喜博が群馬師範学校を卒業したのは一九三〇年(昭和五年)のことである。

(36) 田中耕治「戦後における教育実践のあゆみ」(田中耕治編著『時代を拓いた教師たち 戦後教育実践からのメッセージ』日本標準、二〇〇五年、所収)二十二頁。

渥美が「現場の授業研究」を志向するなかで、その特色として特筆すべきは授業研究のための研究室を校内に設置したことである。

(37) 『近ごろかわったこと』の作文」(『考える』第三号、一九八三年四月十四日)。

(38) 長岡文雄「子どもをとらえる構え」(黎明書房、一九七五年)一一八―一九頁。

(39) 前注(38)、一〇四、一一二頁。長岡文雄は、「私の児童研究について、画期的な出来事が起こったのは、昭和三十六年であった。『近ごろ変わったこと』という文題の作文に想到したのである」と記している。続いて、その意義について、長岡は「この作文には、児童の具体が顔を出す。とくに、「この子」にとつての、最も新鮮なもの、生きる先端にあるもの、または彼を動かしている土台になっているものや、そのつながりが見えるので、私の学級経営は、急に厚みを増すことになった」としている。最後に、「幸いに、愛知県新城小学校(校長、渥美利夫氏)などで、近ごろ変わったこと」の作文を実施されるようになっていく。協力して研究を重ねたい」と今後の展望を記している。長岡文雄「教育実践者の児童理解」(『教育方法学研究』第十一卷、一九八六年、所収)一一三、一二五、一二八―一二九頁。

(40) 田上哲「子どもの思考と人間形成に視座をおく徹底した授業分析の視点から学ぶ」(鹿毛雅治、藤本和久

編著『授業研究』を創る ―教師が学びあう学校を
実現するために― 教育出版、二〇一七年、所収）
一二二頁。授業分析の方法論史からみて、柴田好章は、
上田薫が『カルテ』や『座席表』のように、人間が
人間を端的に捉えた記述を重視して、「授業の記録を
詳細にとる授業分析に対して、距離をおいてい」たと
している。柴田好章「教育学研究における知的生産と
しての授業分析の可能性 ―重松鷹泰・日比裕の授業
分析の方法を手がかりに―」（『教育学研究』第七十四
巻第二号、二〇〇七年、所収）六十二頁。